

【論文】

日本における社会意識としての神観念

定島 尚子

1. はじめに

1.1 本研究の問題意識

お盆やお彼岸に先祖の墓参りをする人がクリスマスを祝い、その一週間後には神社に初詣でに行く…。私たち日本人の生活では、神道の要素、仏教の要素、キリスト教の要素が混在している。私達にとって宗教とは、神とは、どのような存在なのだろう。かつてイザヤ・ベンダサンは、「日本人は日本教徒等という自覚は全くもっていないし、日本教等という宗教が存在するとも思っていない。…(中略)…しかし日本教という宗教は厳として存在する。これは世界で最も強固な宗教である。というのは、その信徒自身すら自覚しえぬまでに完全に浸透しきっているからである」⁽¹⁾という指摘をしている。とすれば、“日本教”の教義、即ち、日本人の信仰形態の基底となる意識とはなんだろう。

日本人の神観念の特徴の一つに“神人合一観”があるとされるが、私はこの言葉に深い興味を覚えた。つまり日本人にとって神霊は、極めて身近な存在と観念されているが故に殊更に意識することが無いのではないかと考えたのである。こうした観念こそが、私達自身にさえ自覚し得ない程に深く浸透している宗教の基になっているように思える。そこで本研究ではこうした観点から日本人の神観念について考察していくことにする。

1.2 神の概念規定

これまで哲学・神学・宗教学等の立場に基づき神観念は研究されてきた。それらの神観念を抽出・類別すると以下の三種類に分けられる⁽²⁾。第一に、「自然神」(例：天体・気象現象等)。第二に、「人間神」(例：人格的神・機能神・祖先神等)。第三に、「超越神」(例：キリスト教等の唯一絶対神)である。一方、宗教社会学を確立した一人であるデュルケームは、精霊的存在にのみ神性を求めてそれらの存在への信仰・関係によって宗教を規定する立場を批判した上で、宗教的思想の本質は「世界を一つはあらゆる聖なるもの、他はあらゆる俗なるものを含む二領域に区別することが著しい特徴である」⁽³⁾とした。

以上の分野における神の概念をまとめると、神とは、聖なるものと認識される範疇の一部である超自然的・形態的・擬人的な超人間的な存在であると受け止められていると言える。次に考えねばならないのは、神観念は社会意識かどうかについてである。社会意識とは、同じ社会の成員間に共有される、平均的に共通な諸思考・諸感情・諸意志の総体であり、成員に対して外在性と拘束性を有する意識と規定される。これに基づいて考えると、神観念は成員が生まれる以前から外在的に存在し、かつ、例えば宗教上のタブーを破った場合に発動されるサンクション等というものを含めた拘束力をもっている。つまり、神観念は社会意識の範疇として社会学的視点で研究を進めていくことは妥当であると言えよう。

1.3 作業仮説

見田宗介は日本人の宗教意識の源泉として《原恩意識》《死者との対話》を挙げている。つまり日本人は西欧人のように生者と死者を完全に隔絶する意識をもっていないということであろう。これらを踏まえて仮説を立てた。

- ①日本人には、人間とは神から分かれた存在・神の子孫であり、自らもまた神になりうるという意識に基づいた“人間神”とでも言うべき神観念が存在するのではないか。
- ②日本では人間と神とが非常に近い存在として認識されやすく、“人間神”という観念は、その信仰集団を強く統合するという機能を果たしているのではないか。

2. 人間が神と観念される諸形態

2.1 日本における神観念の概説

民俗学において示されている日本の神の内容を概説的に示し、“人間神”とでも言うべき神観念の存在の有無を探っていこう。

①「祖霊信仰」は祖先の霊がそばにいて子孫を守護し来訪する存在、という信仰である。先祖からの守護、それに応える子孫側の祭祀、死後は自らも先祖という神になるという意識、といった点が重要な観念として上げられる。②「氏神」は元来、氏族の祀る神だが、次第に村氏神・マキ氏神(同族神)・家氏神等に変化した。つまり氏神は、氏族の祖先神という血縁的系譜ととらえられる場合も、地縁的集合体の守護神ととらえられる場合も、祖先の神化したものととらえられやすい性格を有していると言える。③「家の神、屋敷神」は氏神型に属すると考えられる。祖先信仰を背景とするものと、田と家との去来信仰を伴うものの二種がある。二つとも祖先信仰が重要なポイントになっていると言える。④山の神、田の神、水の神」の三神はそれぞれがイコールで結ばれる特徴を持つ。去来信仰に基づく山と田の神の由来は年の神、即ち先祖の霊と同一視されており、そうした信仰を媒介したのが水の神であるとする考えもある⁽⁴⁾。⑤「海の神、植物の神」共に、神霊の去来ということが特徴である。特に海の神の場合には“漂着神信仰”と呼ばれ、虫送り・疫病送り等の儀礼に連なっている。⑥「妖怪」は「神々の零落」⁽⁵⁾したものととらえられ、威力の方向によって善にも悪にもなるという両義性を示す。妖怪も神観念の一つとして意義深い存在と言えよう。⑦「シャーマニズム」とは神がカリスマ的人間に訪れることで発現されると言えよう。卑弥呼や神功皇后等、民間伝承では人間が神として祀られる場合が少なくない。⑧「職業の神」とは、金工鍛冶等の特殊技術者集団の信ずる職能神のことで、氏神との関連で説明される性格と、身体障害者に対する神聖視という観点で説明される性格があるとされる。⑨「御霊信仰」とは一般に「憤りを含みつつ死んだ者の霊が崇りをなす」⁽⁶⁾と考えられており、怨霊となった個人を鎮めて神になったものへの信仰という御霊神は、日本の信仰の中でも重要な神観念の一つと言える。

2.2 人間が神と観念される信仰形態

前述した神観念の中に人間が神と観念される形態は存在していた、と考えられる。

祖霊信仰において人間は、死後に子孫を守護する神として観念されていた。更に、他の民間信仰の背景としても祖霊信仰が見え隠れしていた(例：山の神、家の神、田の神等)。

また氏神信仰においても、氏神は祖先神の昇華したものと考えられており、即ち人間が神と観念される形態だと考えられる。御霊信仰は憤死を遂げた個人の崇りを鎮める為に神として祀ったというもので、明らかに人間が神として信仰を受けている形態であろう。シャーマンも人間が神と認識された形態であるが、日本におけるシャーマンの最たる者は、天皇であると言えよう。天皇に特徴的な点は、天皇の肉体そのものが聖なる器と考えられていることである。こうした非俗性が、天皇という人間をシャーマンという聖なる人間として観念させることになったと考えられる。

以上の、祖霊信仰・氏神信仰・御霊信仰・シャーマニズムが作業仮説①に合致する観念であると言える。

2.3 日本における神観念の特徴

以上は、日本における神観念を概説的に述べ、その中から作業仮説に合致すると思われるものを幾つか取り上げて詳しく考察したものの流れである。この作業から得られた神観念の中から、日本における神観念の特徴を抽出してみよう。

まず挙げられるのは作業仮説でも提示した通り、人間を神と観念するということである。日本では、神が容易に人間に権化するように人間もまた神になることが可能なのである。次に挙げられる特徴は、神の内在性である。これは主として祖霊系の信仰に見られるが、人間の中に神となる性質が存在しているから人間は神になるという意識があるようだ。つまり、人間に神性を認めればこそ、その力が崇りというマイナス面に現れることを恐れ、プラスに働くよう崇め奉るのである。それが祖先祭祀であり御霊信仰なのである。また一方で神の去来信仰に表される、神の外在性も特徴の一つであろう。祖霊・山の神・田の神・家の神・天皇霊等、外から内に訪れる神という観念が日本には数多く存在している。また、神の二面性も特徴の一つである。御霊や妖怪等、日本の神は人間にとってプラスの存在からマイナスの存在へ、マイナスからプラスへと移行可能な存在なのである。

以上のように考えると日本人にとって神とは明らかに隔絶された超越的存在などではない。日本人にとっての神とは、どちらかというとも霊的な性格が強い。即ち、霊やマナ等といった力・パワー・エネルギーといったものが外部から訪れて肉体に入り込み内在したり、定期的に訪問する存在となる。またそうした神霊の力は、プラスに働けば神となり、マイナスに働けば怨霊や妖怪になるという二面性を持つ。そして神霊は人間に権化したり、人間が神に昇華したりする。こうした点が、日本人の神観念の特徴として抽出されよう。

3. 日本における神観念の社会的機能

3.1 宗教の社会的機能について

社会的機能は三つの立場で説明されている。第1はジンメルや新明正道らの主張で、機能を“働き”や“作用”そのものを指すものであるとする立場である。第2は機能的要件とも呼ばれるもので、あるシステムや全体が存在する上で満たされねばならない必要不可欠な条件のことである。第3は、部分が全体の維持存続の為に果たしている“作用”“働き”の効果を指す。現在では第2、第3の両者を互いに関連して用いるのが主流である。即ち、社会的機能とは、社会体系が存立する為に不可欠な最低限の内部条件である要件が、全体

の維持・存続に対して果たしている作用や働きの効果を指す、と定義づけられる。更にマートンはこうした機能を「体系の適応ないし調整を促す観察結果」⁽⁷⁾としての“順機能”、“体系の適応ないし調整を減ずる観察結果”⁽⁸⁾としての“逆機能”、また、「体系の参与者によって意図され認知されたもの」⁽⁹⁾としての“顕在的機能”と体系の参与者に意図されず、認識されないものとしての“潜在的機能”があることを指摘している。本研究は前述した第2・第3の立場及びマートンの考えを主に進めていった。

以上を踏まえた上で宗教の社会的機能について考えてみよう。宗教には三つの社会的機能があると考えられている。第1は“社会統合機能”である。デュルケームは宗教を「神聖即ち分離され禁止された事物と関連する信念と行事との連帯的な体系、教会と呼ばれる同じ道徳的共同社会に、これに帰依する全ての者を結合させる信念と行事である」⁽¹⁰⁾とした。つまり外在性と拘束性を持つ信念(=社会意識)と行事(=儀礼などの社会的行為)を以て社会構造が維持存続されるように、「人員配分及び所有配分に関する制度化された規範に、超人間的な根拠に基づいて正当性を付与することにより、規範順守の動機づけを高め、規範の拘束性と持続性を強化する機能」⁽¹¹⁾なのである。この機能は必然的に保守的になるので、現状維持機能とも言えよう。第2は“社会変革機能”である。即ち、それまでの社会構造の正当性を否定し、新しい規範に基づいた人員配分・所有配分を行うことで、これまでの社会構造を根本的に改革する機能であると言える。これらは世直しの思想や、救世主待望運動等に見られるが、こうした宗教教団も大きくなるにつれ社会統合機能がより大きなウエイトを占めていく傾向にあるようだ。第3は“対個人的機能”とでも言うべき機能である。これは社会の価値体系の混乱・解体状況や個人の精神的危機等、危機的状況において「心理的・精神的安定を与え、…(中略)…生きがいを回復させ、退行から前進へと人々の姿勢を転換させる宗教の機能」⁽¹²⁾とされている。

3.2 日本における神観念の社会的機能

これまでの宗教の社会的機能についてまとめた上で、次に自分なりにまとめた日本における神観念の社会的機能について考えていきたい。作業仮説②で、日本では人間と神とが非常に近い存在として認識されやすく、“人間神”という観念は、その信仰集団を強く統合するという機能を果たしているのではないかと考えた。この仮説は、祖霊信仰系統の神観念において見られたと言える。祖霊信仰、氏神信仰、天皇と国民等といった信仰に見られる重要な特徴が、“集団”を単位として神霊につながっているということなのである。祖霊信仰では死者の霊は浄化された後に祖先神である祖霊と融合して子孫の守護に当たると考えられている。つまり祖霊は“子孫”という集団に祭祀され、“子孫”という集団全体の平安と繁栄を守護する存在なのである。こうした事情は氏神信仰でも同様で、祖先神としての氏神は、氏族という集団の守護神なのである。また、天皇を神聖視する国民の側は、“臣民”という集団としてとらえられていた。こうした考えをまとめると、祖霊系の神観念を持つ社会は、そうした神観念の下で統合しやすと言えるであろう。つまりこの社会統合機能が祖霊系信仰の順機能であるとも言えよう。反面、この祖霊系神観念には潜在的機能も存在する。前述したように、この信仰において個人はあくまで集団の一部に過ぎない。個人に個性があるのではなく集団に個性が存在したのである。だからこそ社会は統合しやすいという面を持ったが、反面、集団の内部が限りなく等質的になったと考えられる。そ

のような社会では、自分たちと異質な人間に対する排除行為がしばしば行われてきた。それは、村を訪れる特殊技術者や身体障害者等の“異人”が、最初は来訪神として歓待されたにもかかわらず、次第にその異端性故に排除（＝差別・殺害等）されてきた民譚にもうかがえよう。まとめると、祖霊系の信仰は、集団を単位とするという特徴に基づいた社会統合機能を持つが、それが過度に進むと集団内部が均質化して異質な人間を排除する潜在的機能をも有すると言えるであろう。

4. 考察

本研究では日本における神観念を社会意識の一つとし、どんな神観念が存在し、どんな機能を持つのかといったことについて考察してきた。日本の神観念において最も根源的と思われるのは祖霊信仰である。この無意識の内にも人間や全てのものに神性を認める観念により、生かしてくれる神霊に対する無限の感謝が、見田宗介の言う“原恩意識”ではないのだろうか。この感謝の念は報恩という義務感と、祭祀を怠った際の崇りへの畏怖という拘束力を持つ社会意識なのである。あらゆる人の神性の内在を信じ、無限の守護を恩と感じ、生きることそのものが喜びとなる日本人。そんな私達日本人の意識の基盤となるのが“神人合一観”なのであろう。この観念から様々な神々が生まれ、社会的機能を果たしてきた。そしてそれこそが日本人自身には意識されない程に深く浸透している“日本教”なる宗教の根源的な教義と言えるのかもしれない。

引用文献

- (1) 梶村 昇 1988 『日本人の信仰—民族の《三つ子魂》—』 中央公論社 p.200
- (2) 宮田 登 1991 「神」 山折哲雄 監修 『世界宗教大辞典』 平凡社 p.379
- (3) 小笠原 真 1986 『20世紀の宗教社会学』 世界思想社 p.34
- (4) 池上廣正 「霊と神の種類と現れ方」 大間知篤三 他編 1959 『日本民俗学体系 第8巻 信仰と民俗』 平凡社 pp.151～152
- (5) 宮田 登 1979 「総説」 五来 重 他編 『講座 日本の民俗宗教3 神観念と民俗』 弘文堂 p.14
- (6) 柳田国男 1962 「先祖の話」 『定本 柳田国男集第10巻』 筑摩書房 p.67
- (7) Merton, Robert. K. 1949 “SOCIAL THEORY AND SOCIAL STRUCTURE Toward the Codification of Theory and Research” The Free Press, U.S.A.
森 東吾 他訳 1961 『社会理論と社会構造』 みすず書房 p.46
- (8) 同上 p.46
- (9) 同上 p.47
- (10) Durkheim. mile. 1912 LES FORMES L MENTAIRES DE LE RELIGIEUSE LE SYST ME TOT MIQUE EN AUSTRALIE
古野清人 訳 1941 『宗教生活の原初形態（上）』 岩波書店 p.87
- (11) 森岡清美 1973 「社会変動と宗教」 小口偉一・堀一郎監修 『宗教学辞典』 東京大学出版会 p.245
- (12) 同上 p.246